

視 察 報 告 書

報告者氏名： 角井 基

委員会名：生活環境常任委員会

期 間：1月21日（火）～1月22日（水）

視察都市等及び視察項目

香川県広域水道企業団：香川県内における水道の広域化について
豊橋市：ドローン飛行隊「RED GOBLINS」について

所 感 等

香川県広域水道企業団：香川県内における水道の広域化について

全国で初めて、県内の水道事業体がすべて統合して広域化されたということから、どのような経過を経て、それが実現されたのか、直接に話を聞かせてもらいに行った。

香川県内の8市8町が統合し、工業用水道も2市1町に給水している。給水人口は96万人で、1日平均の給水量は30万 m^3 というから、およそ本市の2倍くらいの規模である。統合して2年になるが、そこに至るまでには、やはり10年という年月を要していた。

広域水道企業団は、県知事が企業長、副企業長を高松市長、宇多津町長が務め、統合前の事業所が、そのまま各地域の事務所となっている。職員も、それぞれの事業体の職員がそのまま企業団に派遣されているという形式をとっている。給料も、それぞれの市町の事業体から出されている。

しかし、会計上は企業団に一本化され、それぞれの事業体で区分経理をし、それをまとめるという形になっていて、2年後に事務所を県内5か所のブロック統括センターに集約し、水道料金の検針・調停・収納の取り扱い、給水工事装置の施工基準、入札・契約制度について統一するということだ。

また、各企業体から派遣されている職員の身分を段階的に企業団に移管していき、併せてプロパー職員の採用を開始するとのことだ。そして、令和10年度には各事業体の内部留保資金、企業債残高を一定の基準内に調整し、区分経理を終了して統合を完了させるというスケジュールとなっている。

統合することによって、総務・財務などの事務部門では職員数を減らすことがで





きるだろうと思っていたのだが、余裕のできた人員をこれまで不足していた業務に充てていくので、職員数の減少は期待できないという話は意外であった。

また、現行の水道料金は最大2倍くらいの較差があるのだが、その統一への見通しを聞いたところ、おそらくは現在よりも下がる事業者の方が多くなりそうであり、こ

の点は住民にとって大きなメリットであるといえる。

神奈川県内では、それぞれの事業者の歴史的経過が大きく異なり、統合はまだまだ先のことと思われるが、香川県では渇水による断水が頻繁に起きており、水源の半分を他県に頼っているという実態があって、それが統合への動きを加速させたように思えた。

豊橋市：ドローン飛行隊「RED GOBLINS」について

豊橋市とは、平成10年に災害時相互応援協定を結んでおり、本市とは以前から近い関係にある。今回は、「ドローン飛行隊」が発足し、実務的に活用されているということから、その実態について聞かせてもらいに行った。

そもそもは、5年前、茨城県常総市で鬼怒川が氾濫した際、市の職員が災害ボランティアに行き、そこで災害現場を俯瞰的に見るにはドローンが有効ではないかと思いつき、それがきっかけとなって庁内で検討がされ、その2年後に「ドローン飛行隊」が発足したという。

全庁的に募集をし、17名が集まった。各隊員は、それぞれ自分の部署で日常業務をし、訓練のときはそこから離れ、業務としてあたっており、併任辞令が出されているということだ。

飛行隊の主な目的は、30年以内に発生する確率が70%以上といわれる南海トラフ地震、そして、数多くある風水害への災害対策として被害状況を把握する手段としての応急対策を迅速化することにある。ドローンを飛ばして、そこから映像を伝達し、Web会議システムに載せるということであり、リアルタイムで状況をつかむことができる。

現在、3機のドローンを所有しており、1班5名の3班体制をとり、月2回の訓練が行われている。災害時には3班が同時に出動する想定がされている。

導入するにあたっての経費は、購入時で、大きなものは400万円だが、あとは





46万円、23万円と大きく異なり、維持管理経費は、全体で年間約160万円で、他にWeb会議システムに関わる費用が月額15万円ほど要している。

年間の活動実績は、訓練を含めて約40回であり、河川の浸水や竜巻の被害調査、総合防災訓練、マラソン大会、出初式などのイベントにも活用されている。専門の部

署を設置しているのではなく、隊員がそれぞれの部署に配置されていることによる、いくつかの問題もあるが、聞いていて、民間の事業者に業務委託をしてドローンの映像を得るよりも、かなりフレキシブルな運用がなされており、今後、もっと幅広い分野で活用のある場があるように思えた。

本市でも、すでに一部の部局では使われているようだが、優れた機材の活用は積極的に進めるべきであると思えた。